

腹立たしさ(1995年3月号掲載・谷 直樹)

須磨区の火災から帰って30分ほど仮眠した午前5時46分、今まで経験したことがない激しい揺れで目を覚ました。揺れが収まるまで恐ろしくて布団から出られなかった。

署の外に出ると、歩道を倒れた家が塞ぎ、炎が空を赤く染めていた。それでなくても恐ろしさで気が動転しているのに消火栓から水が出ないのがわかると頭はパニックになり、何をしていたのか訳がわからなくなった。防火水槽に部署し、放水しても日はいっこうに消えない。消えるどころか火は延焼し、またたく間に火の海になった。そんな時、無線であちこちで火災が起きているのを聞くと「神戸はどないなるんやろ」「地震はいつおさまるんやろ」と不安になった。と同時に寒さと疲労と空腹がピークに達し、気が狂いそうになったのは忘れられない。

あの震災を振り返ると自然の力の恐ろしさと人間の無力さというか、自分の無力さが身に染みてわかった。

少し落ち着いた今、通勤途中に瓦礫の中にたくさんの花束を見るとつくづく火が消せなかった、埋もれていた人を助けられなかった自分が嫌になる。